

前衛の戦闘

今や彼我の距離を測定するに、人丸神社の高地は彼我の中間に位す。故に戦闘は同高地附近に於て惹起せらるゝ事は推測し得らるゝ處である。されば前衛は小金井川の線に停止して本隊の展開を掩護し、正々堂々と攻撃前進に移るべきであらうか。熟々人丸神社の高地の價値を観察するに同高地はこの附近に於ける一の要點であつて、これを占領したるものは戦闘遂行に極めて有利である。我にして若し小金井川の線に展開せば同高地は敵の有となり、敵の瞰制下にこの要地を攻撃すると、なり、その不利なるや蓋し僅少ではない。さりとて同高地は彼我の中間に位するものであるからこれを占領するには彼我の爭奪戦が惹起せらるゝことを豫期せねばならぬ。即ち前衛は斯の如き要點はたとひ戦闘を起すもこれを占領を企圖すべきものである。

【答】 前衛は人丸神社の高地を奪取せんとなす。

【情況】 前衛司令官は直ちに前兵に人丸神社の高地を奪取の命じ前衛砲兵を市村北端に出して前兵の攻撃を援助せしめ前衛本隊は吉町に向ひ急行を命ず。

この時旅團長は前衛司令官の許に到着し、前衛司令官の報告を受けその決心を是

旅團長の戦闘指導

認し、本隊の先頭に在りし歩兵大隊を前衛司令官の指揮に入れ人森より人丸神社に亘る間の占領を命じ本隊砲兵を平村北側に展開して前衛の戦闘を援助せしめ、爾餘の本隊の歩兵を郎村より平村を経て中森に向ひ分進を命ず。

前兵は鹽村北端に達す。この時人丸神社を占領する我が騎兵は敵の攻撃に堪へず退却を開始するを見前兵長は直に鹽村北端に展開し人丸神社の敵を攻撃す。敵亦千村方向より逐次南進して人丸神社に急行す。彼我の砲弾は同地に螺旋し壯烈謂はん方なし。

前兵は敵の猛火を浴びつゝ、人丸神社の敵に突入を試み前衛本隊亦前兵の右に展開してその戦闘に加入す。今や吉町人丸神社の線は全く混戦亂闘に陥り勝敗は何れとも決せず。

旅團長はこの時伏山に在りて敵情を觀望するに敵も我と等しく人丸神社の奪取に勉めつゝ、あるが如く千村附近より南進する部隊は逐次その戦闘に加入するを知る。

【問】 旅團長は如何に戦闘を指導するや。

【説明】 今や人丸神社附近は彼我の爭奪戦となり、何れかこの高地を占領し得るや今遽に判断を許さぬ。さりとて本隊の部隊を逐次同高地に注入するは地域之を誣

さざるのみか單に敵を正面より攻撃することとなり、その効果は薄い。宜しくこの場合に於ても敵を包圍するの考案を廻らす必要がある。目下本隊の歩兵は中森に向ひ分進中である。さればこの部隊に對し中森方向より敵の側背を包圍せしめ敵を殲滅するを有利とす。

【答】 旅團は前衛をして依然攻撃を繼續せしめ、この間中森に向ひ分進中の歩兵第二聯隊(第三大隊欠)をして該方面より敵の側背を攻撃せしむ。歩兵第三大隊を豫備隊として歩兵第二聯隊の後方に續行せしむ。旅團長は大森北端に進出す。

【説明】 爾後の戦闘經過は一般の攻撃と異なる處なきを以て之が研究を省略す。本研究は遭遇戦に於ける逐次戦闘加入の一例である。即ち前衛に人丸神社の高地の奪取を命じ、この間主力を以て中森方向に向ひ逐次戦闘に加入したるものである。

## 第九章 將來戰

將來戰が如何なる形式を以て實現せらるべきかは今遽にこれを豫想することは出来ないが、歐洲戰爭の實況と最近に於ける科學工藝の進歩の状態とを以て考察するときは、その輪廓だけを描くことは出来る。而してその形式は元より各種各方面に渉るであらうが、これを要約するときは、戰爭の規模が平面的から立體的となり、戰場が擴張せられて國土の全般に及ぼすこと、戰爭手段が科學化すること、並に武力闘争の外に思想戰、經濟戰の加はること等が最も顯著なる事項である。その結果として戰爭は昔日の如く單に軍隊ばかりで終始し得るものでなく、國民の全部がすべての力をこれに傾注せねばならぬ所謂國力戰を形成すべきものなることは一般に信ぜらるゝ所である。

### 第一節 國力戰

昔の戰爭の多くは單に軍隊ばかりで實施せられたものであつて、國家の全能力を擧げて戦ふ國力戰ではなかつたのである。然るに歐洲戰爭の實驗に徴すると、今後

戦場の擴張

の戦争は到底軍隊の獨力を以て終始出来るものでなく國民の全體が全力を舉げて懸らねばならぬ事が解つたのである。而してその戦争最後の勝利も單に戦場に於ける軍隊の戦闘勝敗の如何のみに依つて決定せらるゝものでなく國民の精神が鞏固であり國內には戦争遂行に必要な物質的要素に富み、且つ國民が全智全能を發揮することに依つて求め得らるゝものなる事が深刻に人々の頭腦に印せられたのである。以下將來戦を豫想してその景況の如何にあるべきかを述べて見よう。

【戦場の擴張】 往時戦争は戦場に於て雌雄を決する軍隊のみが戦闘行動を探り國民は直接その戦禍を蒙ることはなかつた。然るに航空機の發達は戦争をして平面的より立體的に變化せしめ、同時に戦場の範圍を擴大し國土を擧げて戦争の慘害を蒙るべき事となつたのである。即ち宣戦と共に敵の航空機は晝夜を問はず又都たると鄙たるとを論ぜず突乎として現はれ、その搭載せる爆彈燒夷彈時としては毒瓦斯彈を投下して國民の志氣を挫折し或は大都市工場資源地政治産業の中心を破壊し致命的打撃を與ふるの手段に出づべきは豫想するに難くない。その結果國民は寸時も枕を高くすることを得ず諸所に往年の關東地方大震災の二の舞を演出し實に恐るべき光景を呈するに至るであらう。さればすべての國民も戦場に於て戦ふ軍人と同様に決死の勇を必要とするのである。若し國民にしてこの覺悟に乏しき

兵員の増加

ときは第一線に立ちたる軍隊が未だ戦争の本舞臺に入るに先ち早くも國內に於て降服の白旗を翻すの止むなきに至るであらう。

【兵員の増加】 近時戦場に使用せらるゝ兵員は著しくその數を増加したることは第二章に於て述べた通りである。その結果強壯なる男子の多くは銃を執りて戦線に送られ國內の商工業農業を始めとし運輸交通従業員警察に至るまで平時強壯なる男子の従事したる事業は擧げて國內に残されたる脆弱なる男子や老幼婦女子の手に移ることゝなるであらう。しかも戦時に於けるこれ等の業務は極度に能率の向上を要求することゝなるはいふまでもないから、その勞苦は到底尋常一様のことであるまい。従つて國民の體力の強健なることが戦争遂行の重要意義を爲すのである。近時各國が國民を訓練してその體力の増進を圖り團體的協同心を養成するに至りしものは歐洲戦争に於て國民體力の向上を必要とすることを痛感した結果に外ならぬのである。

軍需品の供給

【軍需品の供給】 戦時に於ける軍需品は極めて莫大な數量に上る。而して國民の生活を確保維持することなく外に交戦を持續することの不可能なるに依り國民の必需品の供給は平時と何等異なる所があつてはならぬ。然るに戦時に於ては海外との交通は杜絶しその貿易は全く閉止するに至るものであるから、軍需品は元より國

民生活に要する物資に至るまで等しく國內産業の力に俟たねばならぬ事となる。即ち自給自足が必要となる所以である。然るに近時世界に於ける産業分布の状態を観察するに交通機關の異常なる進歩は逐年産業をして國際的分業に導き生産が品種に依りて地域的に獨立するの傾向を呈することゝなつたから、一旦海外との交通杜絶するときは特殊の國を除き自給自足は困難となるのである。若し國家が開戦と共に自給の能力を有しないときは、忽ちその資源は涸飢し戦はずして敵の軍門に降るの破目に陥るのである。

抑々敵の糧道を絶ちて勝を制することは古來の戦法であつて又戦勝の捷路である。ナポレオンが大陸封鎖を敢行して英國を孤立無援に陥らしめたる史實はその最も顯著なる一例である。將來戦に於ては或は直接武力に依り或は外交手段に依りて對手國の經濟的封鎖を行ひ、その糧道を絶つことを勉むるは當然と云はざるを得ぬ。されば國家は平時より産業の振興を圖り經濟獨立の基礎を作り開戦と共に莫大なる軍需品の需要に應ずるばかりでなく國民の經濟生活を壓迫せざるやう準備する處がなければならぬ。

歐洲戦争に於て米國軍が参加したるは聯合國戦勝の重大原因の一を形成したのであるが、それは米國軍の武力参加の賜と見るよりは世界最大の産業國がその全力

新兵器の創造

を擧げて産業上の能率を提供した結果と見るべきであらう。又獨國が四面楚歌の重圍の裡にありながら五ヶ年の長期に亘り能く戦争を繼續し得たのも戦前より養ひたる産業と工業の威力に因るに外ならぬのである。斯の如き事實に鑑み國家の産業獨立の必要を痛感せざるを得ない。

【新兵器の創造】 戦場に於て敵の意表に出づることは戦勝を得る一の原因であることも既に述べたのであるが、これには幾多の方法手段がある。就中科學奇襲即ち敵の豫期せざる新兵器を創造してその意表に出づることは極めて肝要なることである。又これと同時に敵が突如として我の豫期しない兵器を戦場に用ひたる場合には直にこれに對抗する手段を講ぜねばならぬ。若しその兵器の威力が強大であればあるだけこれが對抗手段を一日も早く考案工夫する必要がある。然らざればこれがため莫大の兵員を損し延いては戦敗を蒙るに至ることがあるからである。斯の如く新兵器を創造し且つこれが對抗手段を講ずるためには到底軍事當局者の力のみでは十分なるものでなく、國民の智能を擧げて懸らねばならぬのである。この意味に於て將來戦は國民の知識戦であると稱することが出来よう。

【思想戦】 歐洲戦争に於て獨國は四圍に向つて善く戦ひ、敵をして一步もその國境内に踏入れしめなかつたにも拘らず遂に屈服の止むなきに至つたのも、又さしものに

思想戦

強大なりし露國が一朝にして瓦解したのも詰りは戰鬪敗北の結果ではなくて思想惡化のためであつた。而してこの思想惡化の原因は種々あるであらうが、兎に角敵の各種の宣傳に依るものであることを看過することは出来ない。この意味に於て近代戰の形式は武力鬪争の域を脱し、戰爭の重點は寧ろ思想戰即ち宣傳戰に移つたと見る事が出来る。

抑々戰爭當初に於ては國民の敵愾心は極度に高潮し意氣衝天の概があるにしても朝夕爆彈の見舞を受けて到る處流血の慘事に會ひ且つ經濟生活上の壓迫を受くるに至れば漸くその意氣は沈衰し更に第一線の戰況豫期に反し悲報相繼いで至るに於ては遂には國民はその戰意を失ふに至り易いものである。このときに方り敵は或は無線電信を利用し或は詭激なる印刷物を配布し、又は非國民的の不良分子に弗彈を投じてこれを煽動し、以て國民の團結力を破壊し戰意を消磨せしむることを勉むるのである。即ち對敵宣傳戰が起ることとなる。昔支那の兵書にも「戰はずして勝つは兵の上乗である」と述べてあるが、宣傳戰は此の上乗の策であらう。

將來戰に於ては國民はこの恐るべき宣傳の洗禮を受くることを豫想せねばならぬ。而してたとひこれ等の洗禮を受くるとも能く理非曲直を辨別し、飽くまで初志を貫徹するの覺悟が必要である。然るに彼の關東地方の大震災の際に於ける東京

市民の醜態を思ふとき我が國民が將來戰の宣傳場裡に立ちて果して必勝を得るの確信ありや疑はざるを得ない。

又宣傳は獨り敵國民に對するばかりでなく、對内的にも必要である。やゝもすれば消滅せんとする國民の敵愾心を振起し、且つあらゆる敵の流言蜚語を打消して國民を善導するためには對内宣傳の必要が起る。「兵の怒るは即ち勝つ」とは國民精神の作興が戰勝に重大なる影響あることを示したる名言であるが、又以て對内的宣傳の重要なことを示したるものと見ることが出来る。

以上例示した處によつて將來戰は國力戰を形成し到底軍隊の力のみを以て終始するものでないことが解るであらう。而して國家の全力を戰爭に傾注するためには平時から所要の準備をなすの必要がある。茲に於て國家總動員が將來戰の必須の要件となる所以である。國家總動員の準備なき國家は到底將來戰の舞臺に於て月桂冠を得ることは出来ない。方今世界何れの國に於てもこの準備に致々としてゐる理由は茲に存するのである。以下國家總動員に關し少しく述べようと思ふ。

## 第二節 國家總動員

國家總動員とは前に述べたやうに國家の活動力を統制して戰爭の要求に應ぜしむるにある。即ち人員・物資・財力・工業・交通その他一切の機能を擧げて戰爭遂行に最も有效なる如く統一運用することを總稱するのであつて、その作用に依つてこれを精神動員・産業動員・交通動員・國民動員・財政經濟動員・科學動員等に大別することが出来る。

### 精神動員

【精神動員】 國民の精神が緊張し協力同心して戰爭目的の達成に努力するの必要あることは既に述べた處を以て盡きてゐる。されば爲政者は常に國民をして平戰兩時を問はずその精神を作興し、盡忠報國の熱誠を培養する事に勉めねばならぬ。これがため文教の振興・社會政策の徹底敵の宣傳に對する豫防策・思想の善導等を講ずべきものである。

### 産業動員

【産業動員】 國家の生産分配消費の關係を圓滑にし最もよく戰爭遂行に適する如く施設することが産業動員である。即ち莫大なる軍需品を生産して軍の要求に應じ一面國民生活を保障するため商工・農業・鑛業・漁業等の生産分配・取引・貯藏・輸送等を統轄し又物價の調節・輸出入の禁制・代用品の發明・使用等を統制する等がこれに屬す

### 交通動員

る。軍需工業動員はその一部分である。  
【交通動員】 鐵道・船舶・通信その他の輸送機關（自動車・馬車・牛馬・輓駄・牛馬等）を統一するのが交通動員である。これ等の機關は戰時に於ては軋轉を極めやゝもすれば無秩序に陥り軍の要求に背馳し、國民の必要を壓迫し易きものである。茲にこれを統制・按配しその能率を向上すべく交通動員が必要となるのである。此の見地によれば我が國に於ける鐵道・通信が官營であることは極めて有利である。

### 國民動員

【國民動員】 由來人員は戰爭遂行の重大要素であつて獨り軍の動員ばかりでなく産業・交通その他何れの方面にも必要である。しかし戰時人員減少の情況に處して國內の機能を遺憾なからしむるには適材を適所に充當しその能率の向上を圖るため所要の人員の統制を行はねばならぬ。これが國民動員である。

### 財政經濟動員

【財政經濟動員】 財政經濟動員とは巨大なる戰費及び戰時に於ける一般經濟を調節して國家財政上の運用を計ると共に一般金融界を壓迫せざる如く財政經濟上の施設を行ふをいふのである。即ち平時に於ては中央銀行の正金保有額を増加し開戦と共に國庫剩餘金の繰入れ或は事業繰延べ中央銀行の借入・大藏證券の發行・兌換停止或は減債基金の流用・公債の募集・増税・新税の徴收によりて國庫收入を増加しこれ等の巨額の増收を適切に運用して軍の要求に應ずると共に對外決濟の圓滑を圖

科學動員

り或は一般金融界に投資してその變調を調節する等これに屬する。  
【科學動員】 將來戰が國民の智識戰である以上國家のあらゆる科學を統一して戰爭遂行に指向する必要がある。これが科學動員である。即ち陸海軍の科學者は元より全國科學界の權威を網羅し相協同して科學研究に従事し同時に各種の工場科學研究所と相提携して全國の科學界を指導統制するのである。

右の外教育工藝等に至るまでの諸般の要素をも悉く戰爭遂行のため統制する必要がある。

以上述べたる各種動員は決して個々獨立するものでなく密接なる關係を保持することを得て最もよく効果を齎すことが出来る。而してこれ等各種の動員をして圓滑ならしめんがためには人心の歸趨を一にし舉國一致することが極めて大切なことである。

第三節 將來戰に於ける新兵器

航空機

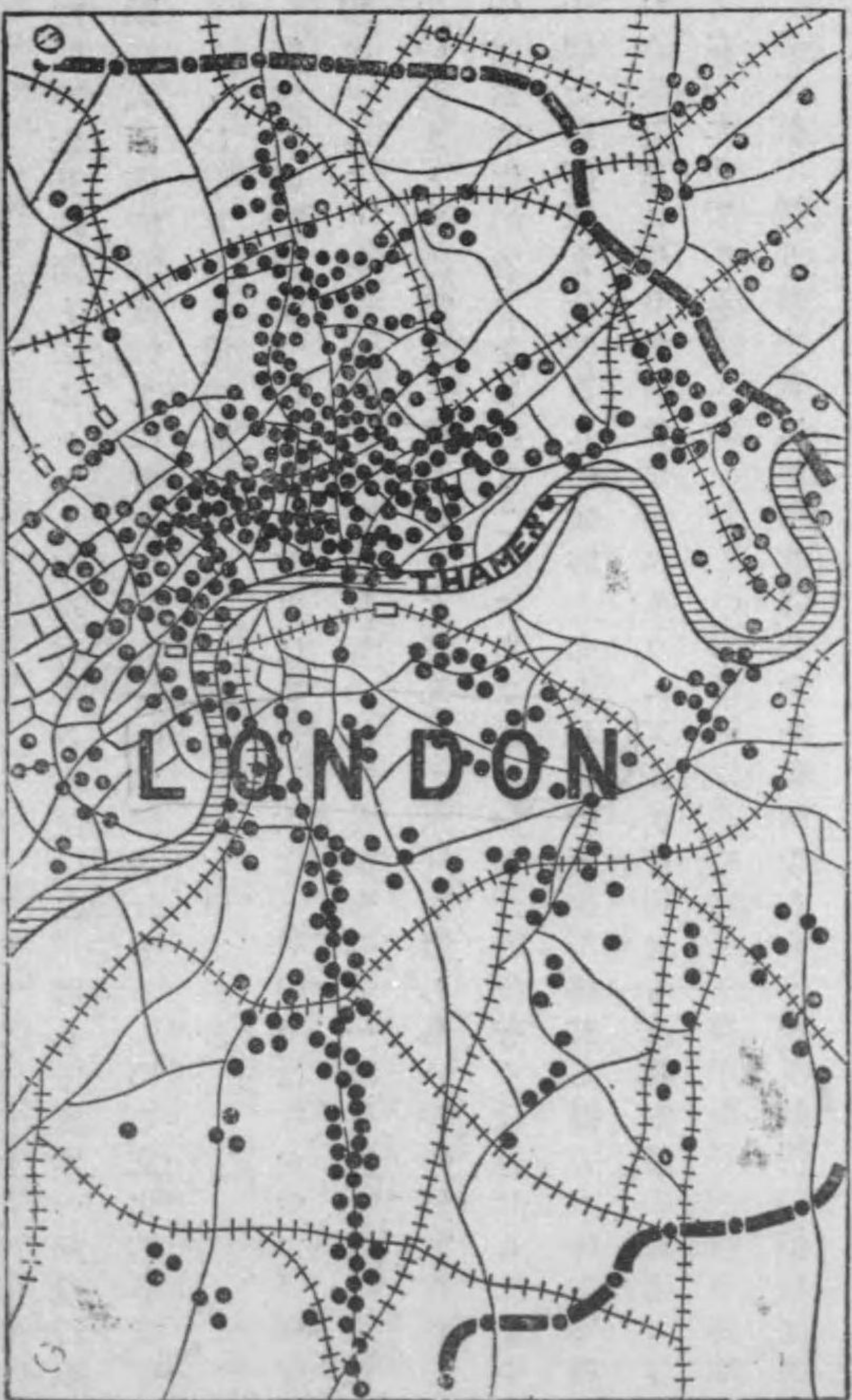
【航空機】 飛行機は米人ライトが發明してより僅に二十年を経過したるに過ぎぬ

が歐洲戰爭の試練を経て長足の進歩を遂げ目下時速五百吉米高度一萬三千米航空時間四十五時間と云ふレコードを有するに至つた。而して世界一周飛行、歐亞連絡飛行、大西洋横斷飛行又は各地の旅客貨物定期飛行等あらゆる文化的事業に利用せらるゝに至り飛行機の將來は益々多望となつたのである。

航空船の歐洲戰爭に於ける効力はさまで大なるものではなかつた。戰爭の初期獨逸ツェペリン飛行船が倫敦、巴里等の都市を襲撃して一時暴戻を逞うしたるも速力の遅きと目標尠大に過ぐると水素瓦斯が火災を起し易い等の弊害ありしたため戰爭間劃時代的効力を收むることは出来なかつたが、戦後著々改善せられ今や時速八十哩、行動距離九千哩、百人の旅客と七十五噸の貨物を搭載し得るものまで製造せられ水素瓦斯に代り爆發性なきヘリウム瓦斯は發明せられ航空船の前途も益々有望となつたのである。

さて航空機が將來戰に如何なる使命を果すであらうか。敵情の偵察は勿論時としてその偉大なる攻撃力を以て戰鬪の勝敗を支配するに至ることあるは想像し得られるが最も注目に價するはその集團威力を以て敵の國土を襲撃してこれを焦土に化することである。既に歐洲戰爭に於てさへ如何に歐洲の都市がその襲撃を被り戦々競々たりしかは今尙ほ世人の記憶に新なる所であるが將來戰に於てはその

被害は更に想像以上であらう。故に苟くも國防を論ずるものは都市等の空中防禦を如何にすべきかに就いて十分考究する必要がある。我が國家屋の建築法も敵の空中攻撃を思はゞ既に革新を要する時機に到來してゐるのである。



圖六十三百二第

試みに歐洲戰爭間に於ける倫敦市街の被つた爆彈の落下景況を示せば右の圖の通である。

毒瓦斯

【毒瓦斯】 毒瓦斯は由來國際法の禁する處であつたが、歐洲戰爭前から各國共に密かにこれが利用法を研究してゐた模様である。而して歐洲戰爭に於ては獨軍が戰爭第二年目にイーブル戰場に使用し英軍をして一時累卵の危きに陥らしめたのを嚆矢とする。爾來各國共これが製造に腐心し瓦斯とこれが防毒具とは智的・ラソ・競争を續けて休戦に及んだのであつて、目下瓦斯の種類も各種各様に亘つてゐるが、その代表的のものを列記すると次の通である。

- 1. 窒息性を有するもの      フォスゲン
- 2. 皮膚を糜爛するもの      イペリット
- 3. 涙を催すもの              クロルピクリン
- 4. くしやみを催すもの      アダムサイト
- 5. 中毒性を有するもの      青酸

右の中フォスゲンとイペリットとは製造容易、原料豊富、效力顯著であるから將來に於て賞用せらるるであらう。

毒瓦斯は始め風上から風向を利用して敵陣に放射したのであるが、その効果は十



分でなかつた。次でこれを砲弾に填實するやうになつて威力大となり、遂に戦争末期に於ては瓦斯弾は各種砲弾中の主位を占むるに至つた。  
さて毒瓦斯の使用は現今に於ても國際法の禁ずる處であるに拘らず各國共に公々然としてこれが研究機關を設けて鋭意研究を行つてゐるのである。その理由とする所を聞くに「敵が國際法を無視して毒瓦斯を使用した場合に於て、若し豫めこれが防禦法を研究して置かねば我は危険である。故に防禦の必要上毒瓦斯の研究を行ふのである。」と又某國有力者の如きは「銃砲弾を以て敵を殺傷するは人道的でない。敵に何等の苦痛を與ふることなくその戦闘力を奪ふ毒瓦斯こそ寧ろ人道に副ふたものである。」と述べてゐる位であるから將來戦に於ては瓦斯が戦闘の有力なる手段として猛威を逞うするに至るべきことは殆んど疑を挿むの餘地がないのである。

毒瓦斯の防毒具としては防毒面酸素呼吸器消毒劑噴霧器等各種のものが發明せられたが、戰場に現はる、瓦斯の種類に依つて防毒法を異にするから仲々厄介なことである。又戰場に於ける軍隊なれば各種の防毒具を準備してこれに應ずることにも出来ようが、國民の全部が各種の防毒具を準備してこれに應ずることは決して容易の事でない。某研究者の發表する所によれば約六十噸の毒瓦斯（六十臺の飛行

火  
砲

機にて運搬することが出来る。)を東京市に撒布すれば市民の大半はこれが中毒傷害を受け事實上東京市は死滅に陥る由である。實に毒瓦斯の防毒法は國防上最も深刻に考究すべき刻下の急務であると信ずる。

【火砲】 近時火砲の進歩は實に目覚ましきものがある。特に歐洲戦争に於ては火砲の口径と射距離とに於て著しく進歩を示した。その一例を舉げて見ると既にその員數に於て戦争當初佛軍の重砲は五百門内外であつたが、戦争第三年目にはその七倍に増加し獨軍は八百門を六倍に増加したのである。口径に就ては歐洲戦争の劈頭に於て雖攻不落と稱された白國リュージュ及びアントワープ兩要塞を數十發の砲弾に依つて顛覆破壊し世界の人心を慄然たらしめたる獨軍の四十二種榴弾砲がある。同砲の射程は七里半、彈長一米五十種、一發の重量約一噸であつた。その後各國は競うて長射程砲の發明に勉め、獨國は更に口径五十種射程三十五里の巨砲を製作し陣地の遙に後方より佛都巴里を砲撃してゐる。又佛國に於ては八十里射程の口径五十二種の巨砲を造り獨國民の心膽を寒からしめたのである。これを以て見れば將來冶金術並に火薬の改良進歩により火砲は益々その威力を増大するに至るであらう。

【戰車】 戰車は敵の機關銃を撲滅し障碍物を破壊するに最も便利な兵器である。

戰  
車

殊に戰場は砲彈の彈痕やその他工事のため砲兵の陣地變換は困難となり前方に突進したる歩兵はやゝもすれば孤立無援に陥り易いのであるが、このとき最も能く歩兵に協力し得るは、あらゆる障礙物を突破して前進する事が出来る戦車である。歐洲戰爭に於ては戦車は未だ研究時代に屬し、その速力遅く機關の爆音高く敵に發見せられ易き等の弊害があつて偉大なる効果を奏することが出来なかつたのであるが、戦後各國は銳意これが改良に努力し速力速く備砲も相當巨大なるものを採用するに至つたのである。

某軍事研究者は「將來戰に於ては歩兵はすべて戦車の内にその姿を没するであらう。」と述べてゐるが、たとひ戦車萬能とならぬまでも將來戰に於て重要な役目を果すべき兵器たるは明かである。

地中戰

【地中戰】 既に述べた如く近時の戰爭は立體的となり、地上海上は勿論空中、水中の戰鬪をも惹起するに至つたのである。而して茲に只一つ残されたる戰鬪法は地中戰である。日露戰爭に於ける旅順の攻城戰及び歐洲戰爭の一部に於ては地中に攻撃坑道を掘鑿して敵陣地の直下に火薬を埋填し、これを顛覆破壊することが行はれたのであるが、地中掘鑿の速度は極めて遅々たるものであつた。従つてこの戦法は單に敵陣地の重要部分の一角を破壊するに過ぎなかつた。火器の甚しき進歩に伴

其の他の新兵器  
光學兵器

ひ地上戰爭の進捗遅々たるに至ることは想像し得らるゝ。従つて將來戰に於ては極めて迅速に地中を掘鑿して敵陣地を覆滅することが考案せらるゝに至るであらう。

【その他の新兵器】

一、**光學兵器** 寫眞は地上用航空機用活動寫眞器等各方面に亘り益々進歩すべきは言を俟たない。又紫外光線を應用したる兵器或は眼鏡等の發達は大に見るべきものがある。蓋し近時戦線の深さ數吉米に亘り火砲の射程著しく増大し航空機は益々上空を飛翔するに至り、加ふるに迷彩(カムフラージュ)を應用せる隱蔽法は巧妙を極めつゝあるの際光學兵器は益々重要な度を増し、その精緻を要すること切なるものがあるからである。

電氣兵器

二、**電氣兵器** 電氣砲、電波操縱兵器、熱電氣による熱線の感知器等は將來如何に進歩すべきや豫測を許さざるものがある。

電氣砲とは電流を通ずる物體は磁場内に於て移動するといふ原理を應用し彈丸を發射せんとするものであつて、火薬を要せざることゝ、射界を變更することなく理論上射程二百里に達すると傳へらるゝ砲であつて歐洲戰爭の末期一佛人の發明したものである。

電波操縱兵器とは無人の飛行機汽艇戦車等を電波によつて操縦せんとする考案である。既に佛國に於てはグリート式ジョワヴォー式等の考案があり、無人飛行機に付ては地上よりの操縦に於て一時間飛行した實例があり、又飛行機より汽艇を操縦することも数回の實驗に成功してゐる。

光學電氣兵器

三、光學電氣兵器 光學並に電氣を共に應用せる兵器として電送寫眞自動觀測照準具探照燈電燈火光通信器等を擧げることが出来る。これ等は將來益々進歩するであらう。

細菌の利用

四、細菌の利用 ベスト、コレラ、結核其の他の有害細菌を敵國や敵陣に撒布して敵の戰闘力を滅却する事は毒瓦斯と同様將來戰に於て利用せらるゝに至るであらう。

その他空想の時代に屬するものには次の如きものがあるが、今日の研究程度に於ては全く實用に堪へぬものでも遠からず戰場に現出することは過去の新兵器出現の實況に徴しても明かであるから、この等空想に屬する兵器に對しても相當考慮を廻らす必要がある。今少しくこれ等に關して述べて置かう。

一、怪力光線殺人光線 電波光線若しくはその中間或は外側の各種の波動その他の放射線を利用して特種の反射及び收斂装置によつて遠隔せる地の動力機關（飛行機軍艦等）又は人體に感應せしむる考案である。動力機關に對しては適時運動を

中止せしめ（怪力光線）人體に對しては組織を破壊して死に至らしむる（殺人光線）ものである。これ等光線の原理は決して不合理でないことに著眼せねばならぬ。

又敵の火藥を自爆せしむる光線も考究せらるゝであらう。

二、壓搾空氣を動力として自進する飛行機 これは莫大なる爆彈を搭載して敵の都市等に落下するもので、魚形水雷又は砲彈と同様である。

三、飛行機施翼の音を便りて自進命中する彈丸。

四、飛行する彈丸を追つてこれに吸引自爆せしむる電磁石。

五、磁力により飛行中の飛行機を吸引するもの。

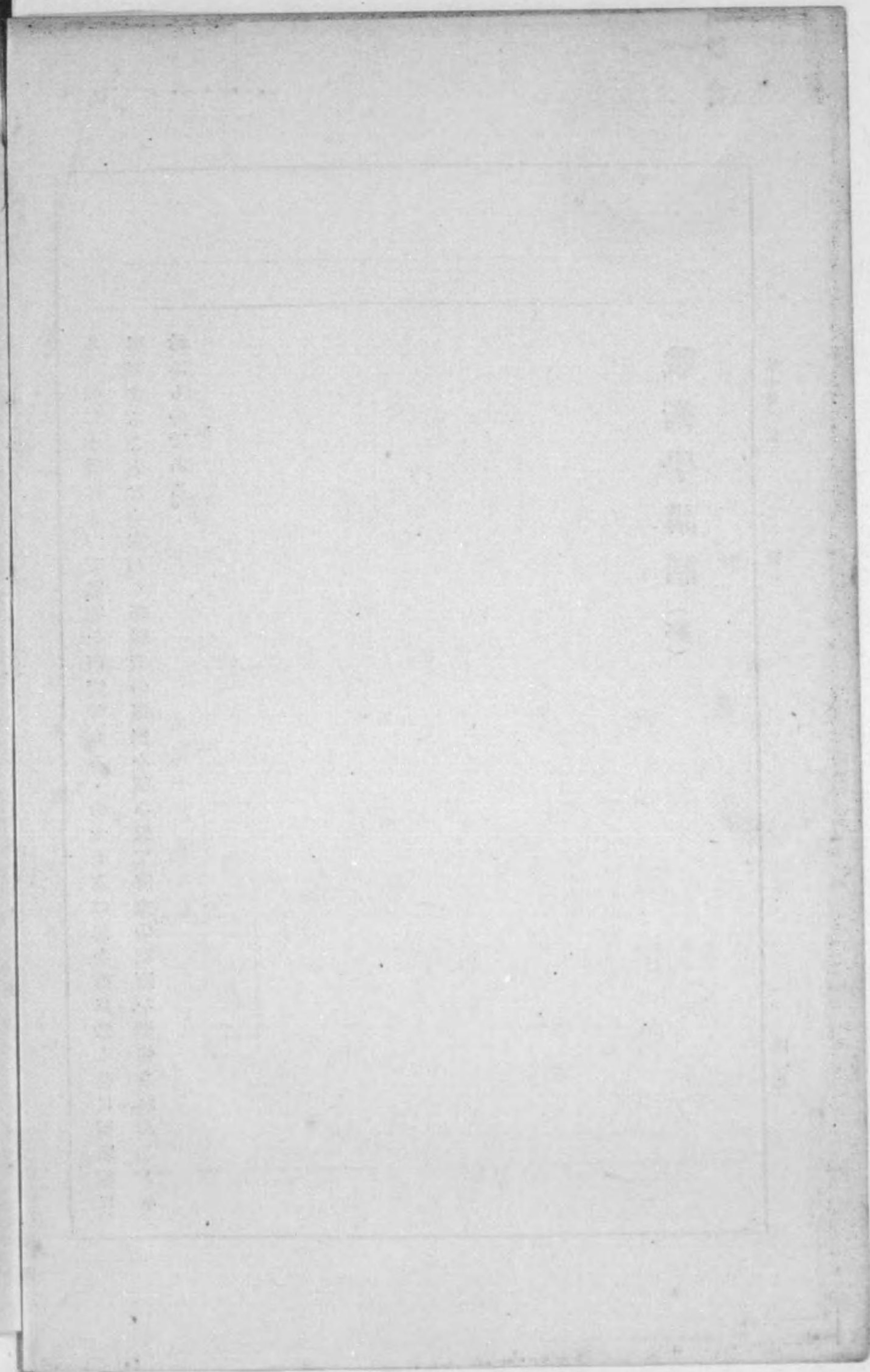
## 第十章 結 論

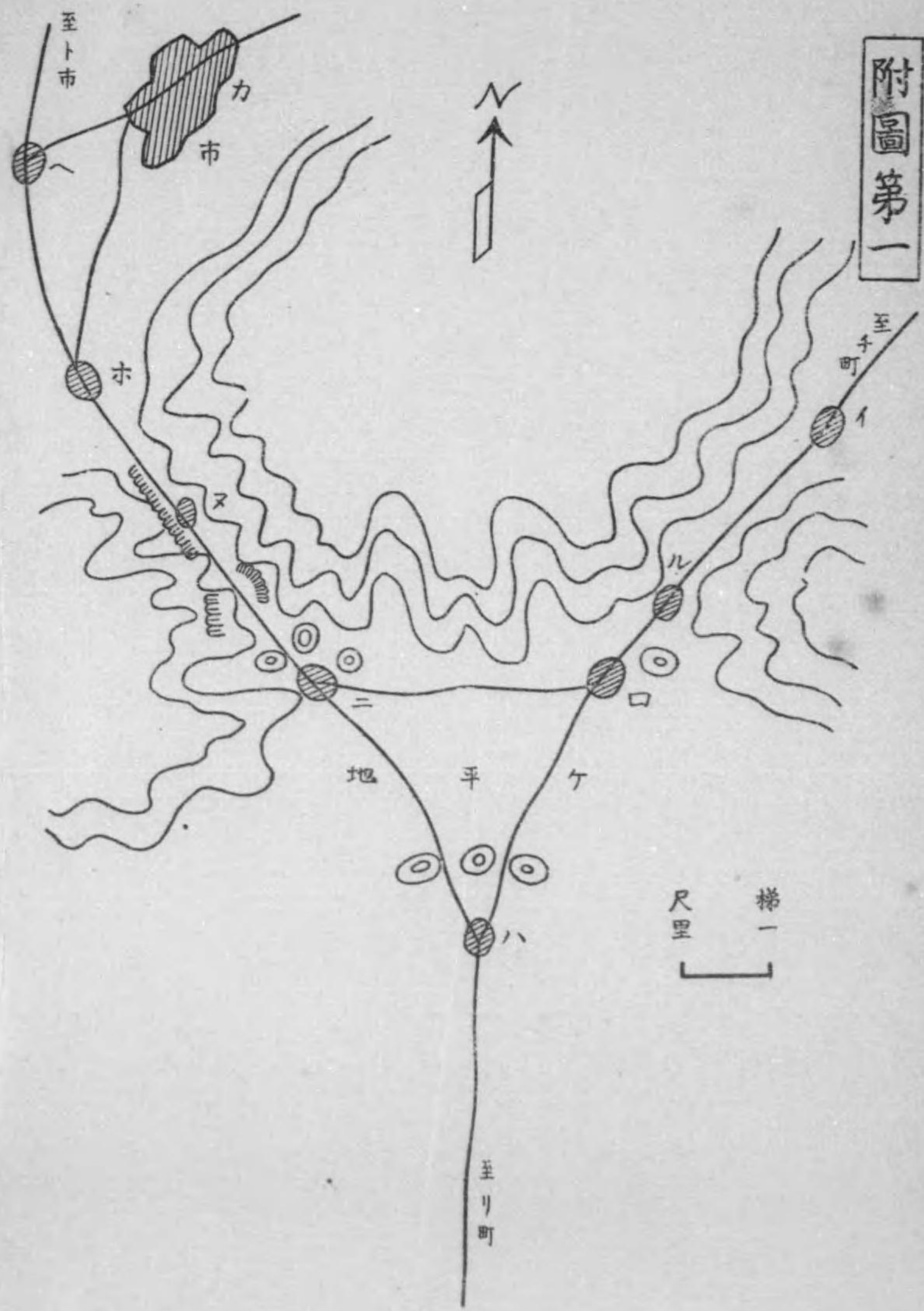
戰術の根本義は千古不易であるが今後と雖も亦同様であるべきを信ぜられる。併しながら軍隊の編制裝備戰團の方術は時勢の推移文化の進歩に伴ひて當然變遷すべきもので未だ曾て永世不變の方式なるものを見ないのである。即ち古來の名將が戰へば勝ち攻むれば破り一世を風靡し名を竹帛に垂れし所以は能く國民精神・地形科學等凡百の關係を顧慮し先見を以て軍制を編み毎に戰術の新方策を案出したる結果に外ならぬ。ナポレオンは「戰術は十年毎に更新すべきものである。」と喝破したが、この一言は這般の眞理を洞察したもので、戰術を學ぶの士は深く玩味すべき所である。

本書述ぶる所の原則は國運を賭して戰ひたる日清日露の兩戰爭に於て幾多の先輩の鮮血を以てあがなひ得たる體驗に、最近歐洲戰爭の成果に鑑みたる、新方術を加味して成つたもので、元より今日に於ける金科玉條と信ぜらるゝものであるが、然も日進月歩の大勢は到底現況に安んずることを許さない。洵に那翁の言の如く今後十年にして新戰術、二十年にして新々戰術の生れ出づべきを逆睹し得らるゝのであ

る。故に本書によつて戰術を研究せらるゝの士も常に思を茲に致し、徒に舊戰術に膠著することなく宜しく新戰術の獨創を試み、以て將來の戰團を準備されんことを希ふものである。

## 戰術學講話 (終)

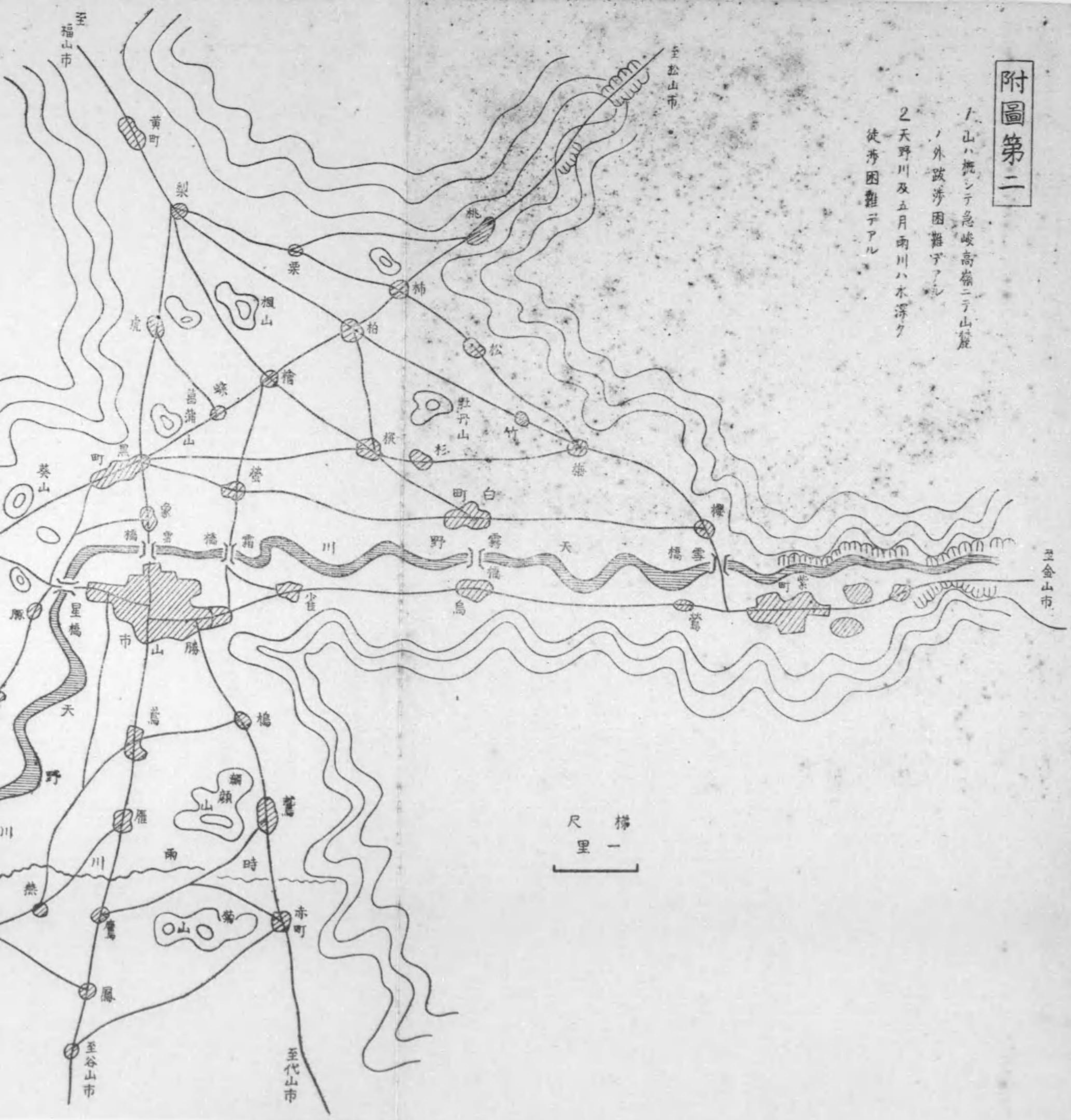




附圖第一

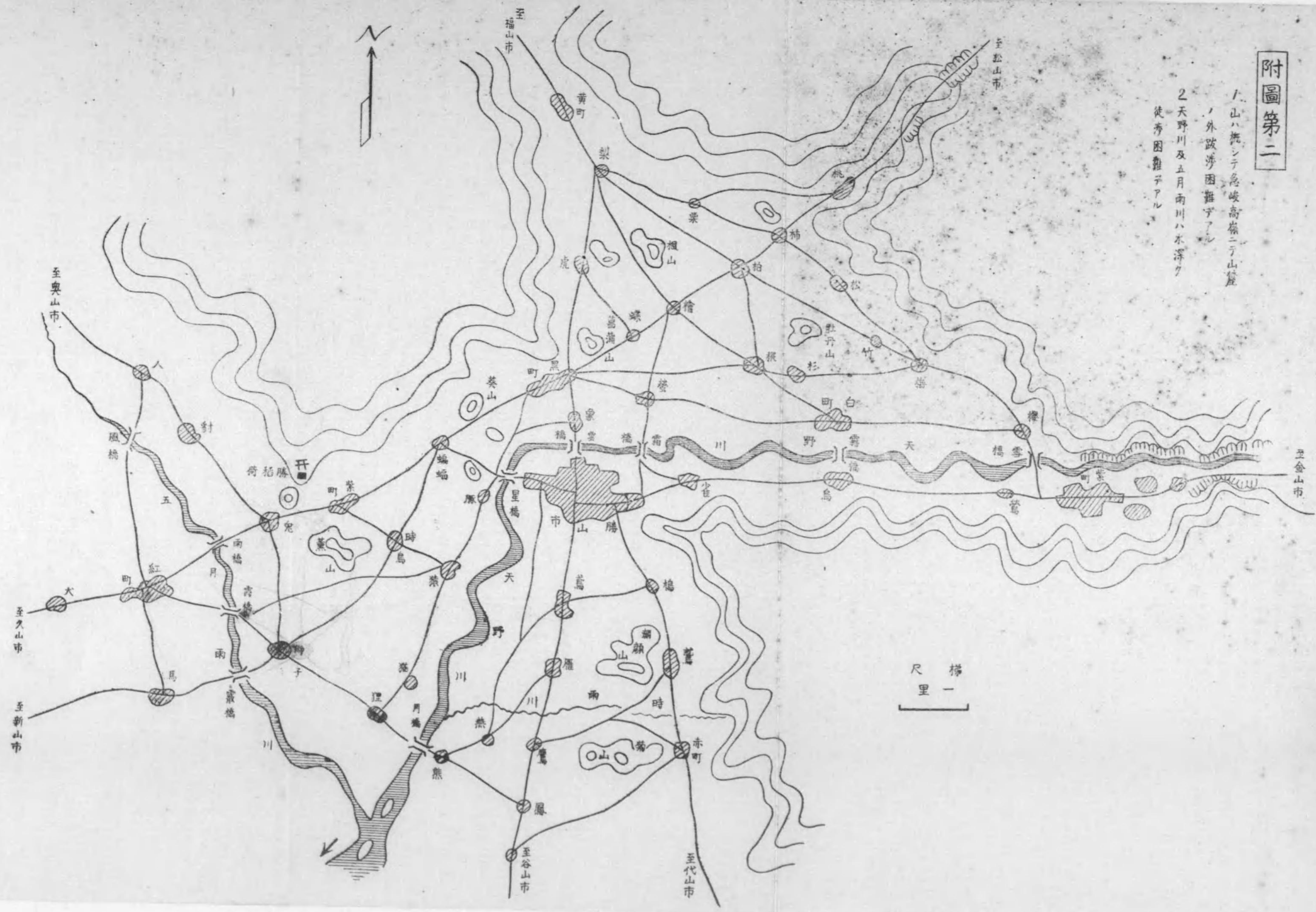
附圖第二

1. 山ハ概シテ急峻高嶺ニテ山麓ノ外跋涉困難ナル  
2. 天野川及五月雨川ハ水深ク徒渉困難ナル

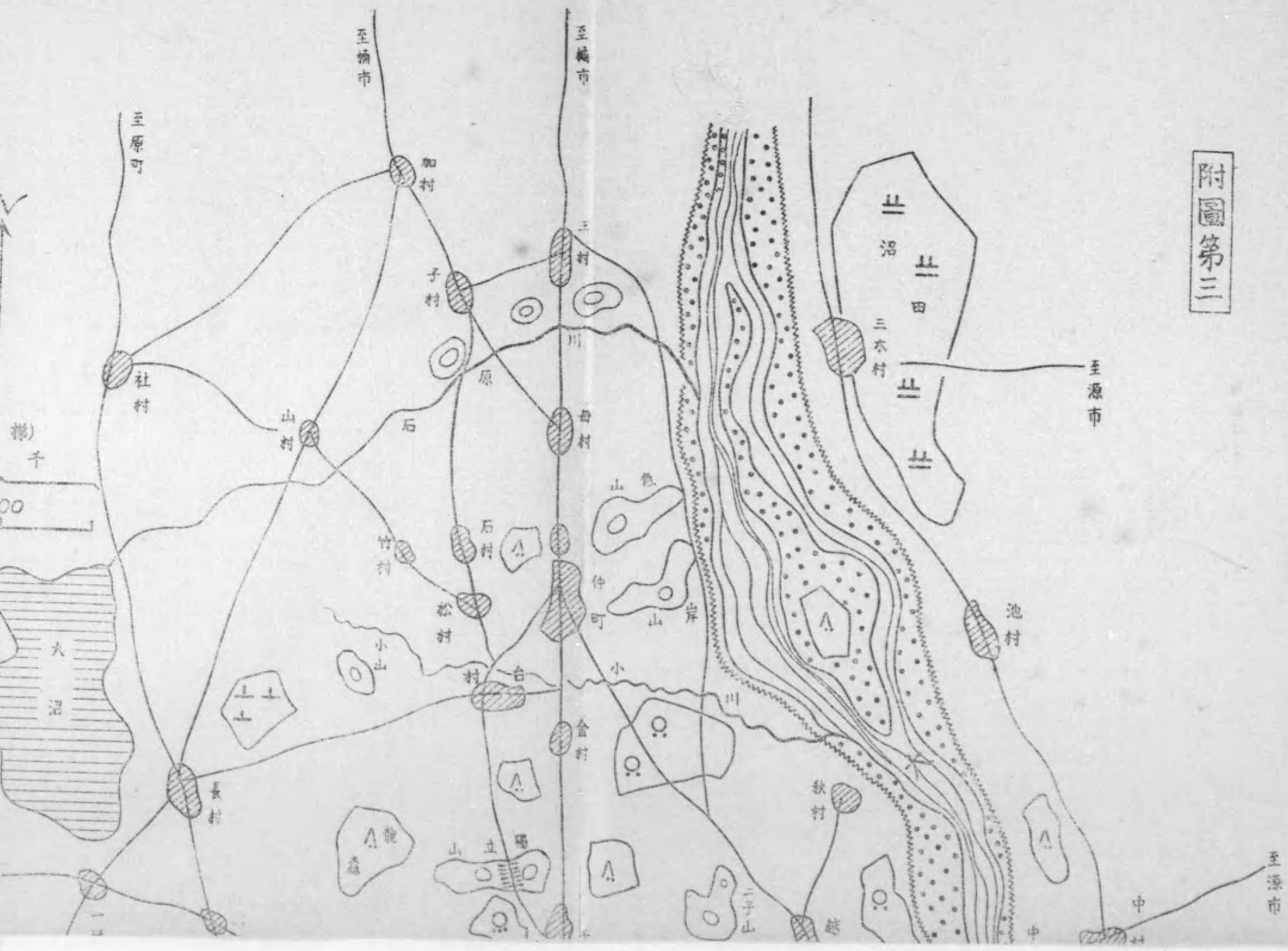


附圖第二

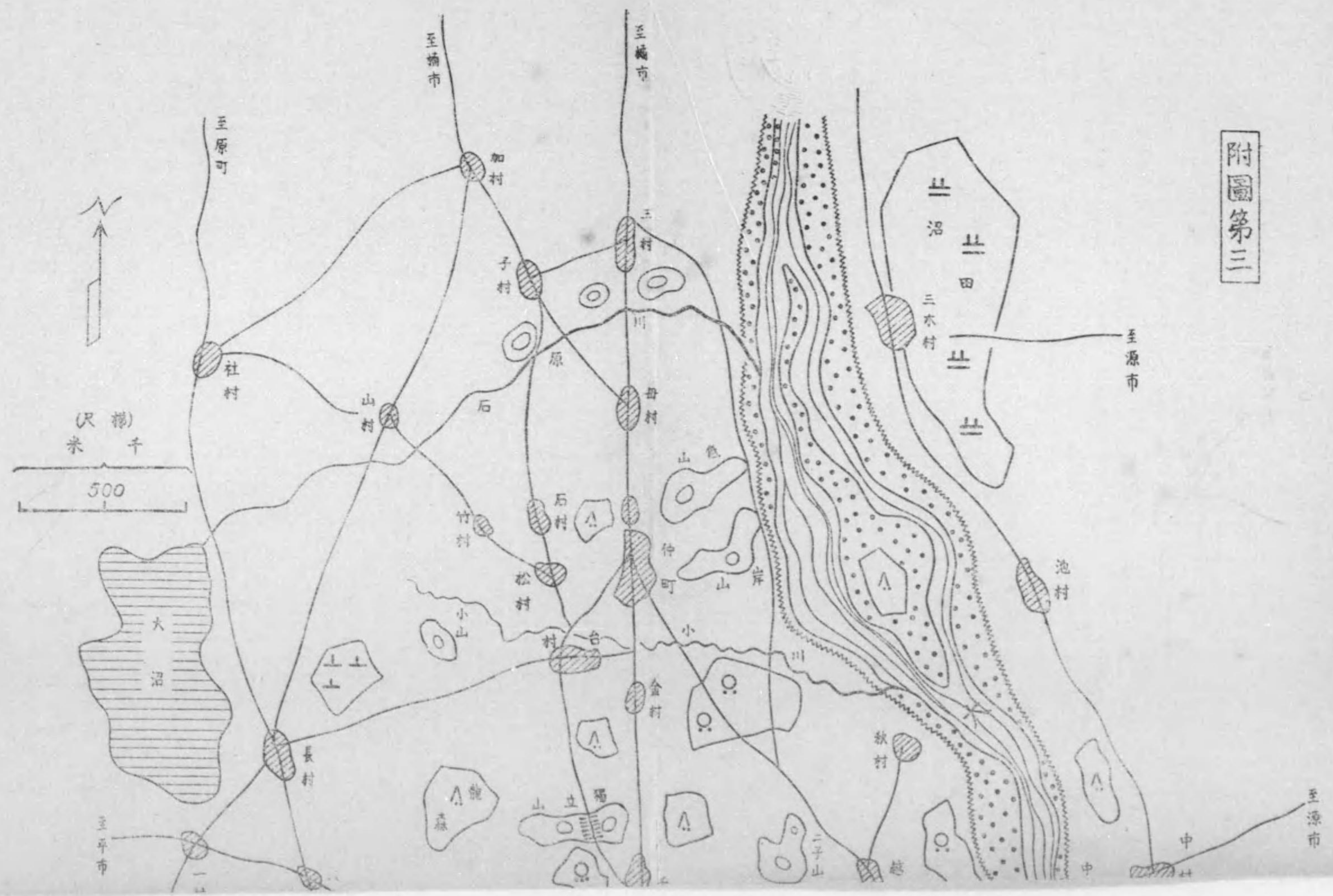
1. 山ハ概シテ急峻高嶺ニテ山麓ノ外跛涉困難ナリ  
 2. 天野川及五月雨川ハ水深ク徒歩困難ナリ

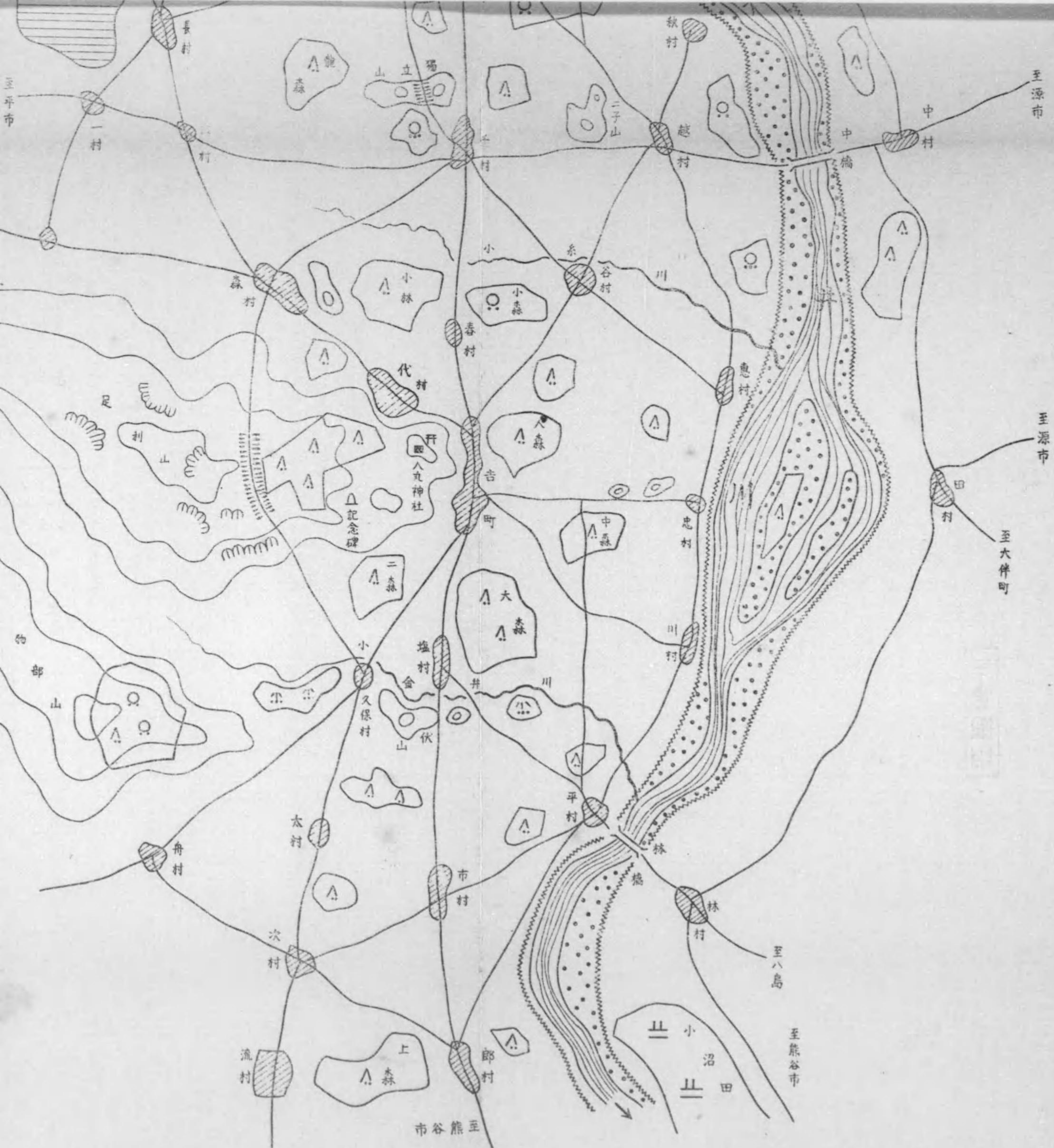


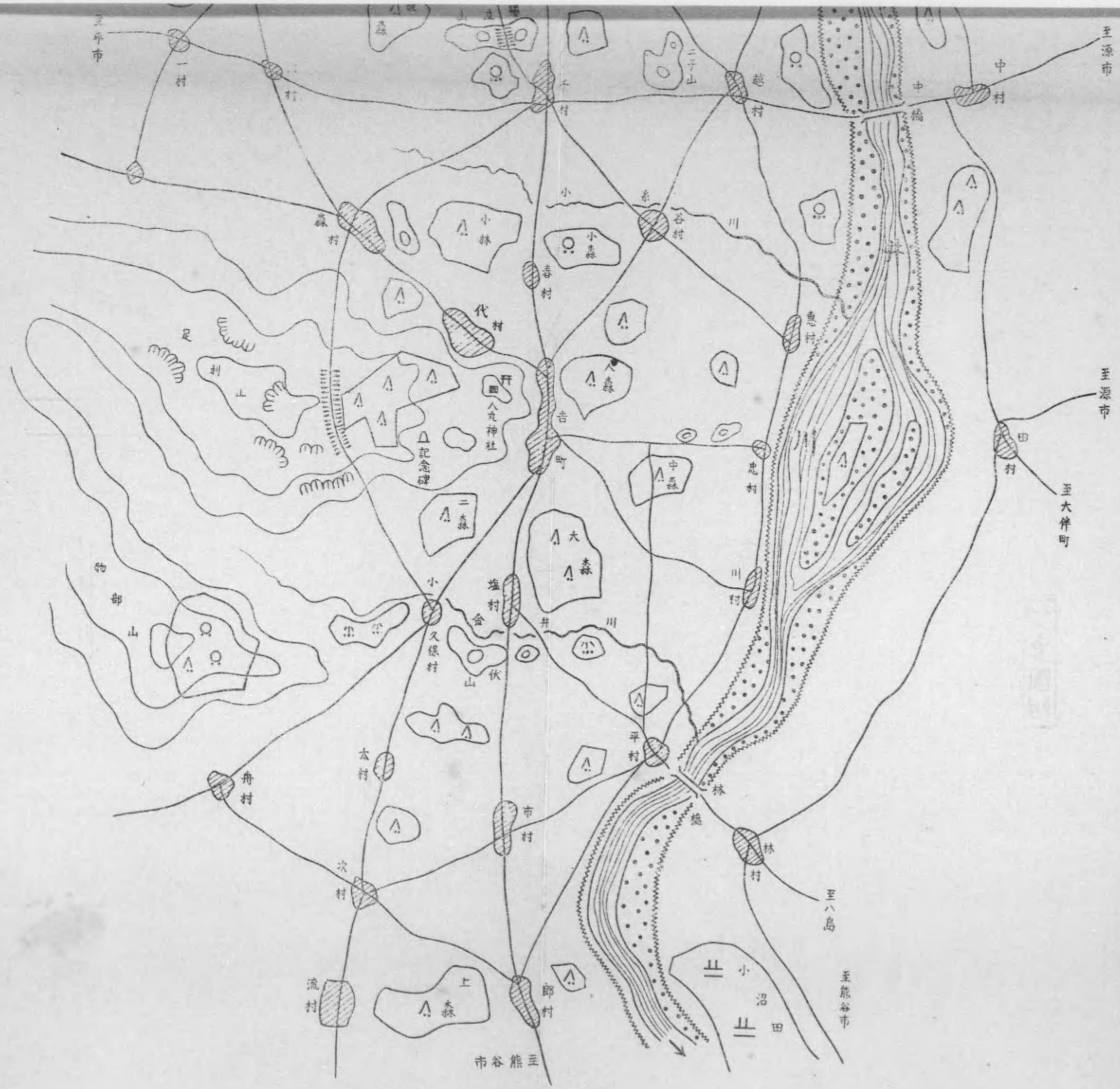




附圖第三







大正十五年十二月十五日  
大正十五年十二月二十二日  
發行



戰術學講話 奧附

定價參圓六拾錢

著者 中村 定吉

東京市牛込區長延寺町六番地

發行者 織田 小三郎

印刷者 森原 保

印刷所 文英堂印刷所

東京市牛込區長延寺町六番地

發行所 織田書店

電話牛込一八七九番  
振替東京五〇八一四番

319  
462

2年4月22日

香	香	香	香	香																
香	香																			

調査簿

終